

# 大学進学を考える

出席者 (ABC順)

女子大学教授 林 淳一

高等学校教諭 前田 哲男

校友(昭二十六六経卒)元喜屋代表取締役 元橋 晃三

大学経済学部教授 仲村 要

大学文学部教授 小川 光暘

(司会) 西尾 昭 (大学教務部長)

西尾 きょうは、「大学進学を考える」というテーマでご意見を交換いただきしたいと思います。

大学進学とはどういうことであるのか、あるいは私学がその私学の個性にあがれる生徒・学生をどのようにして集めたいのか、現行のペーパーテストがどういう意味をもっているのか、あるいはさらにこのペー

ーテストのいろいろな欠点を是正するものとしてどういう方法が考えられるか、たとえばいろいろな角度からの推薦制度を併用することもその一つではないか、というようなことが考えられます。

大学へ行くということが今日の社会においてどういう意味をもっているのか、また入学した大学生諸君が大学をどういうものと考え

ているのか、あるいはまた大学を志す高等学校の生徒諸君がどういうふうな目的で大学に入ろうとするのか、というあたりからお願いします。

## 大学進学の意味

小川 私の場合文学部でございますから、このごろは女子学生が半分おりますのでね。





林 淳一氏

はついていけないような気がするから、いま考えているんだという学生もいます。

小川 女子学生の就職は一般に悪くなっているんですが、私がお世話をさせていただいている博物館学の場合は、ことは数人ほど就職しましたが、全部女子学生ばかりなんです。いままでは男の学生を回してほしいと指定してくるケースばかりだったんですが、ことしては逆転いたしました、女子学生で学芸員の資格をもっている人はいないかという、いまも一件そういう話がきていますので、いね。だんだん職業の領域によっては女子学生の実力が認められてきているところもあるような気がいたしますね。

林 能力はあると思います。ですから、数は少ないですけども、いろんな研究所とか



前田哲男氏

会社へ行きまして、また、教員としてひじょうによい仕事をして信頼されている人もいます。

小川 一般的に男子学生にファイトがないんじゃないかというようなことを先輩なんかから聞いたりするんですがね。女子学生の場合逆で、わりにやる気のある人が多いというところで売れているんじゃないかという気がするんです。それと、このごろの同社社の入学のレベルがひじょうに上がっているという一面があるけれども、どうもファイトがないんじゃないか、むしろ昔の二流、三流の私学のほうがファイトがあるんだということ、見直している企業があつたりするということが聞くんですけれども。

ちよつと話が行き過ぎて……。 (笑)

西尾 高校生は、大学あるいは大学進学をどういうふうに認識しているのでしょうか。

前田 同志社高校は普通の高校とは違って特殊な学校ですからね、最初から同志社大学へ入ることを目的に入ってくる生徒が大部分なんです。ですから、同志社大学へ入る、または大学へ入るという意識は当然あるわけですが、学部を選択するとき、受験生ですと、難易度みたいなものもありますし、よし、それからもう一つは何をやりたいかということ一度じっくり考えなきゃならぬ時期があるはずなんですけれども、悪くいえばところてん式にずうっと行ってしまう。だから、その間にほんとに自分が何をするのかということ真剣に悩む時期がなくて、すつと行くという、ちよつとエスカレーター型の生徒がいますね。しかし、中には実際自分は法学部へ行って司法試験を受けたいと、かなりはっきり目的をもっている生徒、それからとくに男の子で文学部へ行くような生徒はかなりはつきり意識をしていると思います。一般的にいえば、法・経・商ですね、これは能力自体は別にして、はたしてほんとにそこへ行って何をやるかということが、どれだけ真



元橋 三氏

剣に考えられているかということになりますと、かなりむずかしいことですね。そのへん文学部とかそれから工学部あたりというのは、まあ、はっきりしているでしょうね。ただ就職するのに有利だということで、経済なんているのはもう一つははっきりしていないというようなこともあると思いますけれどね。

ぼくらのほうから考えると、これだけ大学への進学率が高くなってきまして、いわゆる大学というものが一定のエリートを養成するような形ではなくなってきたというわけですね。だから、産業界なんかの要請も、大学出て幹部社員をそこから採るといふ考え方はなくなってきたんじゃないかと思うんです。だから、そういうことに対応して、いったい大学自体がどうなっていくかということ

が大きな問題ではないかと思うんですけれど。しかし、そのへんが同志社大学あたりはどうなのか、ちょっとわからないところですけどね。

元橋 私のは京友禅の仕事をやっており、若い人を十人余り教えて、山科にアトリエがあるんですが、大学を出ずに自分がほんとに技術をもちたいと初めからパツと入ってくる子と、一回うろうろとあっちゃこっちゃへ就職して、それに食い足らんで、やっぱり自分はどういうことがしたいという子と、ちょうど二通りありますけれど、大学へ行かずに自分の腕に技術をつけてという風潮はだいぶ出てきていますね。ですから、そういう人を集めると、なんぼでも集まるぐらいですね。これは大学のほうにとっては、将来大学へ行くのが少のうなる可能性が出てくるわけですね。

われわれのときには、小学校は京都の場合ですとほんとに限られた区内だけで、中学校は旧制なんで、好きな中学に行けたわけで、京都市内のいろんな人とのつき合いができる、大学はともかく日本中の友だちができるんだ、だから大学へぜひとも行け、行った限

りはともかくいろんな友だちをつくってこいというようなことを、大学へ入る前にはおやじに言われなければいけませんね。先ほどもおっしゃったように、大学というところは、どこからどこまでがあの人大学で身につけたとか、どこからどこまで大学で習ってきたものやということはわかりませんわな。ただ、何となしにあの人は違うな、やっぱり学校出てはるのか、というようなことを、昔、よう言いましたけれど、やっぱり大学教育というものはそういうものでもいいのと違いますか。

西尾 時代の変化とともにそうなっているんでしょうね。だから、先ほどのお話で文学部とか工学部とか、ある限られたものをやるところに行く人は目的をもっているが、法・経・商についてははっきりした目的をもたないとおっしゃったのは当然であって、なるほど大学の中が学問の体系によって経済学とか法律学とか商学だとか分かれていきますけれども、必ずしも学問の研究者をつくるのが大学でありませんから、どこでもいい、どっか行こうということになるのも当然でありますし、どうもわれわれ教員は自分が学問を毎日の仕事にしているので、すべてその次元だけ

で大学あるいは大学生を考えるという傾きもあるのではないかと思います。現代における大学の役割りあるいは大学へ行く大学生の意識というものを、この際、よく考え直してみる必要があると思います。

元橋 法・経・商の場合は、やっぱり昔から漠然とした目的で、もう一つこれというのが……じゃなかったですか。法・工、とくに工学部なんかははつきりね、ちょっと簡単にというわけにはいきませぬわな。

「女子大生亡国論」というお話がありましたけれど、あれはしかし、官立の場合にはたしかにでき得ればおなごの人よりも男性が入ってもろうたほうがいいように思いますが、ぼくは私立の場合には女子がどんどん来てもいいんじゃないかと思うんですけれどな、あきませんかいな。(笑)

林 官立は女子を締め出せというのは、またいろいろ問題があります。女子大学を卒業して、あと家庭に入りますが、子供を教育するわけです。日本は子供の家庭教育をきちんとしないといけないんじゃないでしょうか。いまの家庭教育そのものが崩壊しかかっております。大学生になってもあいさつも全

然できない、四年ぐらになつてから、朝会つたら「おはようございます」と言わぬといかぬ、ということから教えなきゃいけないわけですからね。

元橋 しかし、それは大学の問題やなしに家庭教育の問題ですわね。

林 そうなんです。ところがそれがおかしくなっています。家庭教育の建て直しも女子の大学卒業生の仕事です。それから女子大卒業生が家庭婦人の組織づくり、消費者運動など、地域社会で活動することも多くなってきました。

元橋 私のめいで、京大の文学部を出た女の子がいるんですけれど、何もせずにこんど結婚しますが、何しに行つたんや言うてますのやけど。そのために男の子ですべてね、もったいない……。(笑)

小川 官立の場合は、税金を食っていますからね。(笑)

元橋 私の姉でも昔の女専の育児科を出ているんですけれど、かにもく育児知りませぬわ、子供育てるのはみなやっぱり実の母親が手伝うてましたからね。育児科出て何をしとるのやって言ってね。

林 育児科を出しても、それはもう子供を全然産んだこともない学生に育児のしかたを教えても、いざ実際となるとそううまくはいきませぬね。これは、男子の学生が会社に入っても同じではないでしょうか。やっぱり大学を出たことの意味はもう少し違うところにあると思うんですけれど。

元橋 だから、専門のことはあんまり出でから役に立つということでもないようですね。

林 単に技術だけの教育は女子大の家政学部でもやっております。そういうものだけをしたいのならば、クッキングスクールに行きなさいとか、言っているわけです。

元橋 英文科やめて会話学校へ行けというのがいっしょですな。

小川 無用の用というのがありますけれども、大学生生活もそんな面がありますね。大学で勉強したことがすぐ身につけて役に立つことはむしろ少なくて、あの四年間の生活はむしろその人の一生にとって大きな栄養になるという点がたいせつだと思えますね。

元橋 とくに同志社の場合にはやはり勉強だけじゃないということをぼくにも習いまし

たし、大学設立の旨意書なんか、私、去年父兄会の委員をやらされてから改めて読み直したんですけれど、もつと入学する前に入学する人にあれを、こういう大学やぞということを書いてあげたいくらいですわ。すばらしいこと書いてありますね。だいたい話は飛んでしましますが、あの中で智育・徳育・体育のバランスのとれたというようなことなども書いてありますけれども、どうもそのへんがちょっと食い足らぬところがあるわけなんです。

**西尾** 旧制の大学なら智育一本やりである程度目的を達したでしょうけれども、現在は大学へ入る年齢も下がっており、大衆化しているから、それだけ徳育あるいは体育というような要素も強く打ち出さないと、現在の大学教育としての足りないものになるんじゃないかという感じがいたします。



仲村 要氏

ないかという感じがいたします。

**仲村先生**、現在の大学生かたぎなんかについてお感じになることは……。

**仲村** 教育論的なことが話題に出ると、必ずいつもこの智育・徳育・体育の話ですね。このことは、特に新制大学の理念との関係でよく議論されますけれども、この点については、率直なところ、大学の先生がたの意識がいちばん古いんじゃないかと思っています。旧制大学的な意識がひじょうに濃厚で、智・徳・体の三育は、大学でのあるべき姿として語られるけれども、実態は決してそうではない。特に同志社は徳育・体育をたいせつにしなければいけないなどというたてまえはともかくも、実際の本音がどこにあるのかということや、具体的にそれがどのように行われている



小川光陽氏

いるかということになりますと、お寒い限りだと私は感じています。私自身が体育関係ですから、被害妄想的不満があるのかもわかりませんが、いかに理念として新制大学が説かれて、智育・徳育・体育が語られても、これはどうも……という感じがですね。

**西尾** 大学の先生がたも大いにスポーツを楽しんでいただいたらよいのではないかとも思いますね。

**元橋** 私、昨年、一昨年と地方へ、ほんとに札幌から熊本までだいたい十ヵ所ぐらゐ参りましたけれど、父兄のかたがたと懇談しますと、そう書いてある、そのことでひじょうに同志社の教育がいい、安心してまかせられるという父兄のかたが多いですよ。懇談でもいふことを聞かれますけれども、大学でそういうことをうとうであるというのは同志社だけですね。しかし、こっちはほうでは、ええのかいな、これ、書いたのと実際と幾分か違うところも、いまおっしゃったようにありますね。

## 同志社にふさわしい志願者

西尾

いまちょうどいいお話を出していたきました。私立大学はこの大学でもそういう個性をもっているということが、教育機関として大きな意味をもっていると思いません。とくに同志社の場合は新島襄という人物に象徴せられるような歴史、個性、建学の理念というものがある。こういうものをわれわれは信じて教育をしているわけですが、やはり同志社を希望する受験生自身がそれをじゅうぶんに認識していただく、あるいは父兄にもじゅうぶんに認識していただくということが必要だと思えます。

しかしながら、大学入学の現状を見ておきますと、国立とのかけもちをやり、たまたま国立に入れなかったから同志社へ来るというような傾向が現実にある。またこれもあとでいろいろご議論願おうと思いますが、テストといいますが、入学者選抜の方法にも一つの原因があって、画一的にならざるを得ないと思えますが、そのあたり、同志社を希望する学生に来ていただくにはどうしたらいいか、ということのようなことについて、お考え

がございましたら伺いたいと思います。

仲村 たまたまこのあとでもオリエンテーション委員会があるんですが、入学した学生についてはオリエンテーション・ウィークなんかをつくって色々方向づけをしていますけれど、入学以前に、なぜ同志社を受けるのかとか、同志社とはこういう大学ですよという意味のオリエンテーションが少ないように思えます。だから、受験生は難易度とか漠然とした有名校意識というんですか、関西の四大私学云々といった基準で考えて受験するわけ

です。建学の精神に引かれてとか、学風云々というところで選んでくる学生はごくまれだろうという気がするんですがね。だから、入学以前のガイダンスですか、オリエンテーションをもっと精力的に行ったほうがいい、するべきだろうと思えます。

小川 そしてやった結果、同志社の建学の精神に共鳴して入りたいという意欲の旺盛な人間が入りやすい条件をつくらなきゃいけませんな。

西尾 ところがそういう気持ちがあっても技術的な問題で入れない、逆に入ることを望まない学生がいろんな事情で入る。これは同

志社としては全く残念なことですね。

林 女子大でも、合格しても手続きしない人がだんだんふえてきましてね。知名度からいいますとだんだん上がってきているわけなんです。が、そうなると、先ほど言われましたように、偏差値とかそういうものだけで考えてどこの大学にしようという学生がふえてくるわけで、ほんとうに入りたい人が入れなくなってきたという現状をどうやって打開したらいかなど、きのうもある会議で話し合っておったんですけれども。

小川 文学部の場合は、同志社の卒業生の子弟の場合、全部マークしてあるんですね。入学願書にその旨書いてもらってありますし。それを調べてみますと、入学合格がわかってすぐに月謝を納めるという、最初から同志社を第一希望にする者の確率が一般の場合の倍なんです。だから、自分の父親や母親が同志社を出ているということです。で同志社のことを知っておって、同志社へ入りたいという気持ちをもって受けてくる。こういう二世、三世は、やはり同志社に積極的に入るという意識がかなり濃厚だということ、あの程度実証されるんじゃないかと思えます

ね。

林 そういう面で、同志社をよく知っている人を入れたほうがいいのか、全然知らない人を入れて同志社の学風に触れさせるほうがいいのかという点が、なかなかむずかしいと思っています。

西尾 しかし、自分の子供を同志社に入りたいという父兄は、少なくとも同志社の教育から何ものかを得て、価値あるものと考えているわけでして、同志社の教育から何も得ないという父兄がいるならば、自分の子供をそういうところへ送らないと思いますね。そういう親の気持ちを子供が継いで、さらにそれを増幅してくれるようなことになれば、ありがたいことだと思いますが。

元橋 ただ、いまの現況で片一方で入学の



西尾 昭氏

不合格の通知、片方では百億円募金の通知を親は受け取っておるわけですね。これはひじょうにほくららの近くで多いんです。いままで書いて金送ろう、同志社のためやというのが、やめや(笑)と、ひじょうにこれが多いんですね。中学の父兄会の会長しておったかたの次の子が中学すべてですすわな。二年続いてまたことしの会長も、次の子がすべてですすな、二点足らんかった。二点ぐらいやったら先生言わんといってくれとおこってましたけれども。そのへんのところなんかでも実際もうちょっと何とかならぬのかなと思いますな。

小川 これは受け入れるほうの姿勢の問題で、ペーパーテスト一本ですと、点で切つてあと落とすんや、ということになりますけれども、やはり受け入れる側はそうじゃなくて、どういう学生を採るかという方向で考える。そうすれば当然出身者の子弟の問題は一つの条件として考えていかなきゃならぬことで、それについて特別扱いというようなこととじゃなくて、つまり審査する基準はいろいろありますが、ペーパーテストはいわゆる知識——これもこのごろは学力といわないところで、得点能力の審査なんだと、いわゆる得点

能力の高い者が入る、これはペーパーテストのいちばん悪い欠点ですけれども、それ以外の要素をいろいろ考えていくと、まず入学テストの条件、原理というのには三つの要素がある。客観性と信頼性と妥当性の三つで、客観性という意味では、ペーパーテストはたしかに客観性はあるわけです。しかし信頼性という意味だったら、何べんかやってみたら、一回はよかったが、二回はだめだと。これはやはり信頼性が低いわけですね。だから、ペーパーテストには信頼性が薄い。それから妥当性というのは、積極的に同志社へ入りたいという気持ち、そういう特殊な心情といえますか、同志社の教育に共鳴して入ろうという内容ですか、こういうものをやはりどっかで見ていかなきゃならない、これは妥当性に当たると思うんですけれども。そういう意味では、やはりペーパーテストのほかに内申——内申のほう信頼度が高いわけですね——そのほか面接あるいはそのほかの条件、それこそ出身者校友の子弟とか、こういう条件を入れて妥当性をはかる。そういうものを総合的に審査して入れるのが、方法としてはやはり正しいんじゃないか。

そういうことで総合審査を一方でやっておきますけれども、ただ、全部の学生をやるということになりますと、いろいろなデータが要りますし、方法のうえで改善しなきゃなりませんので、なかなか一ぺんに踏み切るのはむずかしいですが、徐々に総合的に審査していく方向を考えていく。そうすると、先ほど三元橋さんのおっしゃったようなこともある程度納得してもらえるんじゃないか。あまり点が低くてもこれは無理ですけれども、二点やそこらのところは、もう一ぺんこんどは内申とかいろんなものを検討してみても、この人はペーパーテストの得点能力はちょっと低いけれども、いろんな意味で同志社大学の学生としてふさわしい条件のある人だ、ということであれば、これはもう喜んで入ってきていただけるように、そういう迎え入れの態勢が必要だと思わんですね。やりかたはいいではできないことはないと思わんです。

**西尾** あまりにも現在のペーパーテストは機械的で、しかも採点の技術の問題で試験の内容が左右されるといふようなことは、教育あるいは学問からひじょうに遠ざかってしまっているような感じがするんですね。世間で

行われている形のペーパーテストはますます機械化していく方向になっている、こういうことは高等学校の教育自身にもよい影響を及ぼしているとは思いませんが、そのあたりどうでしょうか。

**前田** 高等学校の教育の中で、あとから出てくると思いますが、こんどの共通一次テスト問題がありますね。入試改善策というつもりで文部省や国大協が中心になって計画がすでに終わりました。来年度から実施されていくことになるんですけれども、あれについて入試改善調査委員会が膨大な報告を出しておられますね。その最初の段階では、学園紛争後の荒廃した状況をともかく是正していく、そのためには入試地獄を解消していくという目的で出発したわけです。ところが、だんだんやっているうちに各大学のエゴも出てくるんでしようし、いろんなことが重なってきて、むしろ改悪になってきた。それからもう一つは高等学校側の対応がひじょうに早いわけです。高等学校側というよりもむしろ予備校が対応をバツバツとやるわけです。それにわれわれと生徒は引きずられている。結局ふたをあげてみれば、いわゆる一次試験ブラ

ス二次試験が二つあわさってきて、特に旧帝大に進学を希望する高校生はいままでよりも負担が大きいというかっこうになってきています。

それで、いま私のほうの学校では基礎学力は何としてもつけなきゃだめだということと、最近の傾向としてはどちらかというと、かなりしぼっているところはあると思います。たとえば、英語科なんか各学年数人の先生が担当しておられますが、一週間に二、三回は必ず試験があるというようにすることで、基礎的な学力はやっぱり大学へ行くんだからつけておく必要がある、それは一生懸命にやろうということなんですけれども、受験対策にかかわるようなことをかなり早くからやっていく態勢はとっていないわけですね。だから、そういう意味ではうちに来た生徒は、受験地獄というような形で高校生活を過ごすということはないと思います。

きょうも、ことし京都大学へ入った生徒が遊びに来ていましたけれども、「向こうへ入ってどうだ。」と聞いてみますと、「やっぱり地方の進学校から京都大学あたりへ入ってきた子の高校生活と自分らとを比べてみたら、

ずいぶんよかったと思います。」ということ  
を言っていました。それで先生のほうも、「君  
らは学校が強制したような受験勉強をせずに  
進学したのだから、えらいわ。」ということ  
を言っていましたけれど、だから、学校全体と  
しては、受験競争にまきこまれることなく、  
わりあいのびのびやらしていただいている、  
これは推薦制度のおかげでしょうけれども、  
生徒は楽しんで高校生活を送っているように  
思います。

元橋 しかし、高校の場合に、一クラスぐ  
らい高校一年のときにお採りになるわけです  
ね、中学まるっぽやなしに。それが高校の中  
で上位を占めよると、いうことを聞いてます  
が、そんなことはないんですか。

前田 それはどこでも同じことだと思っ  
てすけれども、中学の段階で受験勉強をやっ  
て入ってくるわけですから、最初は受験勉強  
やらずに同中から来る者よりもよくできるの  
はあたりまえなんです。それが外部中学から  
きたものが、全真成績の上位へボンと入るか  
らといったそんなことはありません。だんだ  
んばらまかれていくわけです。それは大学な  
んかちょっと似ていると思えますけれど

も、最初の基礎学力テストなんかやると、当然  
わりあいのほうにずっと並んでいますね。  
元橋 三年を出る時分にはもうばらばらに  
なっておるわけですか。

前田 ばらばらとはいえませんが、ど  
どっちかというところのほうにいる子が多いで  
すけれども、必ずしも上はそればかりとい  
うことは絶対ありません。同中から来た子供  
がやっぱり優秀ですね。

元橋 同志社の場合ですと、高校とその前  
の中学というものもひじょうに問題になっ  
てくるわけですね。

前田 同中に入る生徒は、小学校のときに  
は、猛勉強するわけですね、もう九〇%の子  
が恐らく学習塾へ行っていると思います。そ  
れでしぼられてパッと入ってくるわけです。  
そうしたらもう中学で安心してしまおうわけ  
ですね。そのへんからぼつぼつおくれが出てく  
るといいますか、安心してしまつて勉強しな  
いというようなことが起こってくる。

元橋 中学へ入つたらもう大学卒業でき  
たと……。(笑)

林 女子大は特殊な試験方法をやっており  
まして、いまですと高校の内申調査書とペー

パーテストと両方を加味して合算点でもって  
決めているわけなんです。ずっと以前は調査  
書だけでもって入学を決めておりましたが、  
京都なんかそんなことはありませんけれど、  
ほかの県へいきますと、高校にいわゆる一流  
校から何流校まで現実にあるのだから、高校  
間格差を考えてくれなくては困るという高校  
側から意見もあつて、ペーパーテストも入れ  
るようになったんです。女子大の教師の中に  
は、昔は大学に入ってからひじょうに学力の  
伸びがあつたのに、いまはそれがいい、とい  
う人もいます。いまは、はじめはいいが、あ  
んまり伸びない、やっぱり昔の選抜方法もよ  
かったなという意見もあります。

小川 同志社の学内高校から大学へ入った  
場合ですね、追跡調査をやっておりますと、  
学内高校の出身者はだいたいまん中あたりで  
すね。悪くもない、トップクラスもあること  
はありますが、だいたい平均しているという  
ことはいえるんですね。しかも、出身者は浪  
人しておりませんので普通の学生よりも一つ  
ぐらい若いんです。そういうふうなことを計  
算してみると、やはり一貫教育のよさが出て  
いると考えてもいいと思うんですね。ですか

ら、智育・徳育・体育のバランスという点からみても、これは受験勉強、ペーパーテストをねらってきた人の場合は、徳育・体育の修練は押さえられておりますから、その点学内高校出身者はバランスはとれてきておりますね。それだけでもやはり一貫教育のよさははっきり認識できるんじゃないかというふうに思います。

仲村 話がもとへ戻りますが、経済学部では入試委員会が常設されておりまして、その中でよく議論するんですけれど、大学の入学試験という常識的にはペーパーテストだというふうな考えが定着しすぎている。だから、用語から吟味していったら、たとえば大学入学者選抜方法のうちの一つがペーパーテストであるという言い方をすべきであるというふうな議論があったり、できるだけ多様な選抜方法を考えよう、ペーパーテストもいいたらう、また高校推薦というんですか、学校長に一任して、いい学生を送っていただくのも一つの方法として考えたかどうかとか、いずれにしても選抜方法はこれが唯一で正しいんだというのではなしに、いろいろの方法があってもいいのではないかというよう

な議論があります。現実には、さきの学校長推薦を採用していますし、一貫教育としての学内高校からの推薦入学、ペーパーテストと、いまのところ三本立てですね。

そして、そのうちのどの方法の入学者の成績がいいかという追跡調査もやっているわけですが、学内高校出身者がいまのところいいんです。単位取得数、平均点、これらが必要しも人間のすべてをあらわしているとはかぎりませんけれどね。その次が学校長推薦、そして一般のペーパーテストで入ってきた学生たちと、こういう大ざっぱな傾向が出ていますね。ただ、先ほどの文学部のお話とちょっと違うのは、学内高校の学生諸君の場合、ひじょうにすばらしいのと、まずいものとの両方があるって、その平均をとるといいほうになるというので、最高と最低のグループとともに学内高校でして(笑)。

元橋 それは成績のしょう。

仲村 学業成績です。

元橋 本人がいいか悪いかはまた別ですが、それはわかりません。成績というのは平均点と単位取得状況の二つを申し上げた

のですがね。だから、それが即い人物かどうか、これはそうはつきりとは……。

元橋 成績が悪くてもやっぱり将来性のあるやつかどうかということも問題になりますわね。そのへんもよう見ていただかんと。

西尾 あるいはまた逆に一貫教育が画一化した生徒を作らなかつたという一つのメリットだと思えます。やる人はそうしてどんどん伸びて、やらない者は悪いだらう、やれば伸びるという、つまり平均値的な人間を生まないうという意味で、いいことだと思います。

仲村 そうですね。ですから、いまの議論の中でも意識の底に、私たちが不用意に使ってしまいましたけれども、いい学生、悪い学生といういい方で彼らの優劣を平均点や単位取得の数で考えるという、このあたりにも大変問題があるように思います。

### 入学者選抜方法について

西尾 たしかにペーパーテストはいちばん一般的なんですけれど、はたしてこれが学力を表現するものかどうか問題であつて、いわば抽せんの本質的にかどうか問題で変わらない、くじでも引けばいちはん公平で客観的じゃない

かということになるわけですね。しかも、私立大学の場合は高等学校の全科目についてペーパーテストができませんから、二科目あるいは三科目という限られたものになってしまう。時間も限られておる、また大量処理ということで試験の内容が限られるから試験をする方もかえってこの方が楽だということ、イメージに入試即ペーパーテストという感じになったのではないかと思います。国立の場合にはなおさら公共性云々ということで、画一的な方法をとらざるを得ない。

しかしながら、これについて反省が出て、共通一次テストをやり、さらにきめ細かく二次試験をやるというふうになったのは改善しようという一つの努力だと思ふんですね、一次試験で足切りなり、ある程度線を区切って、数少ない受験者に小論文を書かすとか、面接をさせるとか、あるいは何らかの実技を課するというふうに努力をしているわけですね。ですから、われわれ私学としては、なおさら、個性豊かな、あるいはとくに同志社と精神的なつながりの多い男女青年を入れるためにいろいろ入試方法の多元化について考えていかねばならぬと思うのです。

で、たしかに共通一次試験も一つの努力のあらわれではあるということになるわけですが、私立学校には私立学校の個性があり、やり方もある。必ずしも機械的にこれに同調できないということ、いつの間にか国立大学共通一次試験と自然に呼ばれてしまうようになって、私学は初めから関係ないのだという気持ちになっているのですけれども、共通一次試験については私学がいろんな意味で参加し、それによって何らかの結果が得られるなら、こういうことも考えてよいと思うのです。しかしながら、現在の時点では収容人員の点で早い話が私立が参加したらパンクしてしまつて、結局これは国立大学受験生のためのもという事実上の結果は出ているのです。それはいままでの画一的なペーパーテストだけという方法から抜け出したいという念願の一つのあらわれですが、われわれはわれわれなりに、また幸いなことに私学はそれぞれ独自の入学者選抜方法を選べるわけですから、これを考え出していかねばならぬと思います。

元橋 学内高校の場合はやっぱり先生がたがその人の個性あるいは能力に応じて、進学の学部の相談をある程度されてますね。だから一応そこで面接の試験があるみたいなものですね、いうたら。

前田 面接試験というのは、大学のほうでやっておられるわけです。

元橋 一般のペーパーテストの連中も全部あるわけですか。

前田 推薦生にかんしては、

元橋 推薦だけでしょう。だから、推薦で受けている者は、一応先生がたとの面接試験も受けているわけです。ところが、ペーパーテストの場合やったら、これはないのじゃないですか。

小川 テストの点だけで他の面は何もわかりませんわね。それに、われわれにわかるのは受験番号だけですから人格がないですね。

元橋 そのへんで二次の面接ぐらいあつてもいいのと同じです。そうはいきません、数からいうて。

仲村 これはもう数の問題と切り離しては考えられないと思いますね。

元橋 それでいきますと、点数でだいぶ下まで一次試験で採っておけますわな。

仲村 この種の議論、いつもするんですけど、いままではペーパーテスト一本やりで

きたからその弊害論がどんどん出てきておりますね。ところが、それじゃ、それを全部なくしてしまつて、たとえば学校長推薦のみでということになると、こんどはその内申制度にたいする批判もたくさん出てくる可能性があります。だから、そのあたりむずかしい問題があると思いますね。

元橋 だから、少なくともペーパーテストもやる、面接もやる、体育テストもやるぐらいやつてももうたらいちばんいいんですけれどね、同志社という学校は三つともやりよるでということになりや、毎晩二条城一周してマラソンしようというような……(笑)それよろしいで。

林 面接はいいと思いますね。それで段階はつかないと思いますけれども、やはりこれはおかしいとかいうのだけでもわかるんじゃないかと思ひます。

西尾 たとえば入学試験の採点についても、大量ですからコンピュータ会社が機械的に処理してくる。カタカタと数字が打ち出されてくるのを見ると、すべての人間が数値に置きかえられてしまつて、それ以外の何ももないというような、非人格的なやりかた

について、やっている者自身があまりにも事務的などという感じがしまつて、いい方法はないかといつも考へるのです。

前田 面接という問題が出ましたけれど、京都では進路指導の研究会がございまして、ぼくはあまり顔は出したことないんですが、そこから文書が来てまして、ある名古屋の医学系統の大学ですけれど、第一次試験は通つたというんです。第二次試験が面接だったのですね、それでどうも落ちたらしいんです。それで、なぜ落ちたかということですね、この面接の客観性という問題はひじょうにむずかしいですね。それは何がこじれたかといつたら、やっぱり職業の問題とか何かそういうところがあつましてね、君のそこは医者でないのかというようなことをきいたとか、そういうことがからんでかなりもめたらしいんですけれども。

そんなことで、面接というものと及落とがかわりましたときには、これはひじょうに客観性に乏しいということで、なかなかそこまで踏み切れないというのが現状だと思ひます。私のほうでも面接はやっていたのです。ただ単なる形式というふうなかつこうに

なつてしまひまして、ここ数年前についにやめたんです。

仲村 たとえば学内高校の推薦入学の場合面接をしていますね。ところが、経済学部の場合、もし不適格なら面接の評価欄にNOの意味でNと書くことになってはいますが、Nと書けばその理由を説明しなければいけないのです。私も何年か面接をしてきましたけれど、送られてきたものには全部合格のPをつけました。面接で及落を決めるのは現実的にはひじょうに困難ですね。

林 女子大なんかだつたら、感じのいい人に……(笑)点数がよくなるんじゃないかと、そう簡単にできないということもいわれているんですけれどね。しかし、この人は大へ来てから精神的に不安定なことになるんじゃないかというようなことは、発見できるんじゃないか。ほかの大学でもそうだと思ひますが、一年に入つてきていろいろ精神的な問題を起こす子がいるものですから、面接のときに発見できないのかなという意見があります。しかしそういう人がいたとしても、大へ来てから入学してからアフターケアをちゃんとやるほうが同志社の教育としていいんじゃないか。

やないかという意見と、両方あります。

元橋 学生の数がこれだけふえますと、なかなかアフターケアのほうがむずかしいですね。

仲村 極論しますと、面接者である私が決めました、それでいいと思うんです。面接というのは本当はそこまで徹底しないとだめだと思っんです。面接した結果、この人物は同志社大学の学生として入学させるのに適格だ、この人間は私の評価ではだめだからだめだと決めました、というふうに、自信をもって決めるべき制度だと思っんですね。

元橋 しかし五人なら五人で面接されるわけでしょう。

仲村 現在行っているのは一人ないし二人です。

元橋 それを複数でやりになったら。たとえば五人でやって全部点数つけるとしますね、一番上と一番下をカットしてまん中だけでいくとかね、スキーマのジャンプの採点みにい……。

小川 やはり多数の主観というのは一つの客観的な正確さをあらわしますからね、そういう方法がありますね。これにも技術と能力

の問題がからんでくるとは思っますけれども……。

いろいろ考えて、先ほど仲村さんのおっしやったのと同じような、やはり多様な方法で多様な人間を採ろうというのが、一つの落ちつくところじゃないですか。

仲村 現時点ではそのような感じがしますね。ただ、それを一つの試行錯誤として、ほんとにこの方法がいいということが見つければ、これはもうそれに踏み切ればいいと思っんです。

元橋 ベーパーテストだけではぐあいが悪いということももう大学側の先生がたもじゅうぶん認識されておられるから、徐々にでもおっしやったように多様化されていったらいいと思っますね。

小川 ただね、同志社に入りとうなかつたけれどほかが落ちたから来たど、これだけは断りたいという……気がしますね。むしろ成績はまあまあだけれどもいちずに同志社へ入りたい、という学生に来てもらいたい。

元橋 そうですね、可能性さえあればね。

小川 だから、スポーツができ、あるいは德育の面でじゅうぶんな情操教育ができてい

る、宗教的な面で同志社教育にふさわしいと、そういうふうなことが客観的にわかれば、こういうものを総合的に判断したらいいと思っんです。

西尾 実際卒業まで同志社へ来たことについて不満を持ちつつ過ごすというのがかなりいるらしいですね。私、いつも入学願書とか入学金を納める書類に、同志社教育を受けたくない人は断わるという文言を書き入れてはと言っんです。そういう人はお断わりします、金も入れてほしくない、願書も出してほしくない。むしろそのぐらいの見識をもつて、ほんとに来たい者が来るように努力しようじゃないかと、言っているんですがね。

仲村 ところが、受験生に聞けばみな同志社へ絶対入りたいたい……。(笑)

小川 それでもなかにはあるんですよ、おやじが言うたから来たけれど、専攻のこと何も知らないどね。学内高校の場合でも、なかに正直なのがおるんです。私のほうはABC評価ですけれど、前にCというのをつけたことあるんです。それで校長先生がいっらしやったりして、いろいろすつたもんだしましたけれど。なかにはそういうのもいることは

いるんですね、けれどもそれは例外です、たしかに。

元橋 いま仲村先生おっしゃったように、経済学部でそういう採りかたをされててどうなんですか、学内高校はある一定の数量採っておられますね、一般高校の推薦は六十人か八十人かそんな程度ですね。

仲村 八十名。

元橋 そうすると、スポーツ推薦といううなのは数人でしょう。

仲村 十数名ですね。

元橋 十数名、経済学部で。率はひじょうに低いわけですね。もうちょっとそういうなのをウエイトを上げるとかいうことはできませんですか。

仲村 そうなればけっこうだと思えますね。

元橋 校友なんか全く関係ないんですね。う。

仲村 いまのところ経済学部では考慮していません。先ほど申し上げた多様な採りかたというところでいろいろと模索しているところですね。

元橋 しかし、ある程度校友関係でもスポ

ーツ関係でも門戸を開いていたかぬとね、早いこと。そうしないとなかなかできませんわね。

小川 校友、スポーツというのがからむと、特典入学というようなことは、何か悪いことをしているような風潮があるんですね。

元橋 この前も京都新聞にひじょうにこう……二十何人か文学部ですか、ありましたね。

小川 あの記事はだいたい内容に間違いがあるんで、ほんとにけしからんと思うんですね。れど。

元橋 しかし、相当詳しく書いていられるということ、やっぱり学内から出ているような話ですね、これ。

小川 ただ、これですと、校友とかスポーツだったら点が低くても入れているという印象を与えますけれど、事実はそのじゃなくて、内申、テストその他を総合して点を出して、そして大体同じレベルで入れているんですね。

元橋 けっこうすべっている者もいますのやから。

小川 だから、これは総合審査をやるのと単純審査との違いだけで、新聞に書いてあったような特典入学では決してないです。スポ

ーツが一流であるというふうなことはやはり一つの評価の条件ですからね。それを単純に何点足したということになるとぐあいが悪いんで、そういうことではなしに、スポーツ歴その他を総合したものを一定の点の中で評価する、内申も評価する、ペーパーテストも評価する、そういうものを総合してみても、そしてこの人はじゅうぶんだと思えば積極的に入っていたかどうかでね。こういう方法を文化学科方式としてやっているんですね。

元橋 こんど卒業していくときの——これは必ずしも約束づける必要はないんですね。けれども——就職にかかわってくると、スポーツ関係の連中はひじょうに就職率がいいですね。

小川 入学も一〇〇%定着ですからね。一般のペーパーテストの場合はほんとに定着率も悪いです。合格はしても、同志社へ来るのかわからぬのですからね。

仲村 その新聞の論調でも、結局大もとにやはり点数一本やりが一番公平である、客観的であるという抜きがたい信仰があるわけです。まともなのは点数だ、それ以外は駄目だ、という考え方があられるわけでしょう。だから、

どんな理由をつけようが点数が低いことは、入試の場合、問題だということのようです。元橋 別の採点方法があるんだということだね。

### 特技の評価

西尾 スポーツも人間評価の一つの基準であり、その基準が客観的かつ公平であればよく、ペーパーテストの得点技術の高い者がただそれだけでりっぱであるとはいえない。ですから、いろんな制度も客観的な原則があり、広い意味での教育という点から見ると同志社にふさわしいものであるならば、その基準に従って入れるという客観的な原則を立てれば、それは多元的な入学制度の一つであると思います。幸い本学の場合はペーパーテストと学内高校からの推薦と、それから一般高校からの推薦という多元的な方法がとられているわけですから、ここでもう一步前進させて、スポーツの問題あるいは校友の問題、それからもう一つは外国で教育を受けた帰国子女の問題、こういったこともひじょうに大きな問題になってきますから、考えてみるもよいと思います。

実際外国で教育を受けた人は、日本の学校教育を受けてないわけですから、いわゆるペーパーテストという点から見ればたいへんなハンディキャップがある。しかし逆に普通の人間では得られない国際感覚もあり、そういうものは今後さらに重要になってくる。その長所をとらえて大学へ入れ、その長所を生かしつつ卒業させる。ところが、現在のペーパーテストではそれはもう不可能であって、いくら外国でりっぱな教育を受けても合格できません、あたらそういう人の能力を生かせない、あるいは外国でいい教育を受けておりながらそれをすべてご破算にしてまた受験技術のために勉強するという、むだなエネルギーを使わねばならない。こういうような問題もあるわけですからね。

元橋 こんどしかし、それは受け入れられるように同志社のほうは準備をされているんでしょう。

西尾 そういう人を受け入れる中・高をつくろうという努力がなされているようです。が、われわれは大学としてもやはりそういう人をスムーズに入ってもらうために、宿題として考えていかねばならない。これだって、

学力という点からいえば、受験技術にたけた人から比べれば問題なく低いはずですよ。しかし、そういう人を入れて教育をやるといことは、日本のためになると思いますがね。

ですから、そういう場合もあるいはスポーツにしても校友にしても、その他の能力で、もっと広く考えれば芸術的能力もあってもいいと思うんです。すばらしく音楽ができるとか、芸術的能力があるという人も入れる。結局ペーパーテスト一本やりというのは、受験用の知識があれば、それが唯一の人間の能力であるという片寄った見かたで、それをわれわれは商売がらしてしまおう。それについての反省として、こういう多元的な入学選抜制度もじゅうぶん考えてみなければいかぬと思うんですよ。

仲村 先ほどの、入試で何点取れば同志社大学の教育を受けられるだけの資格というか、能力があるか、ここの押さえがいはばんむずかしいんですよ。一つの目安は、入学した学生が普通に卒業しているかどうかなんです。パーセンテージを出してみると、だいたいの線が出てきますね。私たちの資料では、入試の成績と大学へ入ったからの成績という

のは、必ずしも相関は高くないという結果が出ています。

小川 あまりないですな。

仲村 むしろ高校の内申との相関関係が高いですね。スポーツ推薦の場合でも、入試で低い点数を取った学生が意外とずっといい。逆にそこそこの点数を取って入った学生がまずいというように、散らばりがあるわけですね。だから、何点とったからどうだというのはひじょうにむずかしい。そうなりますと、現実問題として入試の方法論の中でこのことをどのように決めていくかというあたりになると、相当むずかしいですね。

元橋 しかし、いまの校友で片一方で不合格の通知をもらって片一方で募金の通知ももらってというね、これはほくは同志社にとつては絶対マイナスやと思います。これを何とかある程度納得できる、その子ができぬのは、じゅうぶん親は承知しています。だけど、そこそ普通であればやっぱりそれは受け入れていくだけのね、そのかわり卒業はなかなかできないというのはよろしいやないですか。

西尾 問題は入ってから勉強であつて、ほんといえは入るはやさしくして出るをかた

くする。ところが、入り口のことについてひじょうに熱心に客観的だとか学力だとかいいながら、卒業させるときにはたしてそこまでわれわれは熱を入れているでしょうか。これが逆でなきゃいかんのですね。門戸を広く開けて、そしてほんとうにすぐれた人間だけを卒業させるという責任を、大学はもたねばならぬと思います。

元橋 留年二年、三年というのがいますよね、親ごさんは困ったことですね、本人は喜んでファーストとしてますわな。学校は本人にたいして、おまえ早いこと出ていけということとは何もやってませんね。すつとおいてある、長年授業料払っておるといふようなものですか(笑)。そやから、特に校友なんかの場合入れるのも何とかもう少し門戸を広げてもらえたら……。そういうのどっか入る料はないんですか、そんなものつくれませんかいな。(笑)

西尾 客観化されていないといろんな問題が起こってくる。だから、スポーツにしても何にしてもそういう制度をやつぱり全学合意のもとで世論を背景に客観的なものをつくっていき、その原則によって入っていたたく。これ

で公平ということが満たされるわけですね。  
元橋 私立ですの、少々特殊な場合ができて、私は考えかたさえ、パッチリ合うておつたらだいいじょうぶやと思うんです。

とくに慶応・早稲田なんかでも最近になってからやかましくいうていますわね。慶応のカラーがなくなるから付属高校つくって一貫教育をやるのやとか、いまごろやりますわね。もう慶応と東大とが全くわからぬぐらいになつていらいですね。

西尾 そうですね、野球でも弱くなつてしまつて、東大に負けたりするんですから。

いまも話に出ましたが、スポーツでも全般的に低調である。やはりすぐれたスポーツマンがその大学に出るといふことは大学全体の士気を高めるのに大きな役割を果たしていると思ひますね。

元橋 やはりスポーツの強い選手がいるということは、その大学が自由であるといふものすごい印象ありますね。スポーツが弱いといふことは即何か大学が小そう固まつておる。強いやつがいるといふのはそれぞれにその自由さがあるわけですね。それだけ大学生でありながら競技にぶち込んでいる、しか

も片方で先生がたあるいは友だちの応援も得られているという、自由さがあるという印象がありますね。

仲村 ただ、実際に指導している立場からいいますと、元橋さん、私は必ずしも樂觀的じゃないんですよ。というのは、高校教育、とくに受験校における高校教育というのは、結果的に勉強とスポーツの両極分化を促進しています。たとえば中学生の段階で、君は勉強ができるからスポーツ活動をやめて受験勉強に打ち込みなさい、君は頭の方はもう一つだがスポーツがいいからそれでいきなさい、というふうな指導が進みすぎているのではないでしょうか。たとえばペーパーテスト一辺倒の批判もその一部はここにあると思うんですよ。いまの学生をほんとに冷静に観察しますと、中学からそういう育てられ方をしている、無反省のまま大学生になっているという、ひじょうに恐ろしい側面があります。だから、必ずしもスポーツができる人間は、……というふうに樂觀視できない点もありますよ。

元橋 もっとも、智・徳・体のバランスとということがありますからね。片一方だけで全

く智が……。

仲村 智育偏重を非難するのだったら、逆にスポーツ偏重が非難されないように……。

元橋 それは気をつけな、いけませんね。

仲村 人間のバランスという問題が、入試の段階でも非常にたいせつだと思っんです。

元橋 とくに体育のことをやかましく言っているのは、智育だけが認められて、体育が全く認められないためにぼくは言っているわけなんです、いちばん最初に申し上げたようにやはりこの三つのバランスのとれたというのが、同志社の教育のよさですね。このへんのところは決してスポーツができてお知恵は零点という者を同志社の大学生として受け入れるというところまでは、これはじゅうぶんわかっているつもりです。

仲村 現行の制度が、はたしてそれにどれほどマッチしておるかという反省と、もっといい方法、もっと違った基準でスポーツマンを認める入試の方法がないかどうかというの、つねに模索していかないとけないと思っんです。そうでないと先ほど申し上げた両極分化の両極を同志社大学で引き受け、ひじょうに苦勞しているという現実が続

いていく可能性がありますね。

元橋 まあ、ある程度はできぬとね。実際いまの学生諸君で、手紙もらうと、なんとへたな字書いておるなというのが多いのですね。こういうことが必要であるのかないのかわりませんけれど、日本語がへたすぎますわ。

西尾 私は法律学を教えるかたわら手紙の書きかたの指導もしているんです。拜啓、謹啓、冠省の使いかたから、早秋の候とか酷暑の折から、とか。それが書けませんから、そこまでしているわけです。ちょっとオーバーサービスじゃないか、と思っんですけれど、社会に出たらすぐ要ることですからね。それからあいさつのしかたですね、半分国語の教師みたいなことですが、やむを得ないですね。

林 私もそれやっています。漱石全集の書簡集の中に、弟子からの手紙について、こんな書きかたじゃだめだということをはじょうにいていねいに教えている書簡があるのを見てから、私もしています。やっぱり漱石も教師でしたからね。

西尾 学内高校では比較的のびのびとスポーツなんかにも打ち込めるという雰囲気はありますね。

前田 いま仲村先生もちょっとおっしゃいましたけれど、最近、スポーツが盛んになりました、とくに野球なんかですと一部の野球専門学校みたいなものが——昔だったら京都でも府立の中学や高校が甲子園に出たことがよくありましたし、同志社も出られたわけですから——あつて、そういう学校が毎年甲子園へ出てくるような状況ですね。その点うちの学校はそんなに目だつて強いスポーツはありませんけれど、たとえばラグビーとかアーチェリーとかフュンシングあたりは大学で活躍している選手もあり、かなり多くの生徒がスポーツと勉強を両立させております。受験勉強がありませんから、それだけ余裕があるんでしょうけれども、わりあいバランスがとれてやっているように思います。

それから大学のスポーツ自体がまたもう一つ程度が高くなつてきていますから、大学へ入つてすぐさまいわけゆる一流選手についていくのはなかなかむずかしいみたいですから、ラグビーなんかではかなり学内高校出身者がレギュラーの中に入っていますね。

小川 スポーツの場合はレベルが高くなればすそ野も広くならぬといかんですな、高い

けれどひよるひよるじゃいかんで、やっぱり山は高く、すそ野も広くと、そういう大学でありたいですね。

元橋 いちばんそれが理想ですね。

小川 そのためには、スポーツ選手に何か肩身の狭い入りかたをさすような採り方はほくはいかんと思うんです。やっぱり胸を張つて入れるような受け入れかたを考えていきたいと思いますね。

仲村 ですから、先ほどの問題の解決がたいせつだと思えます。

入試要項にもはっきりそういった制度を載せていけばいいと思うんです。いまの入試要項ですと、ペーパーテストと内申書を基準に入学者を選抜します、という表現ですが、それ以外の方法があればオープンにするべきであるということをはっきりしています。自信をもってオープンなものにすべきです。

西尾 ご承知のように大学には入学制度改善懇談会という組織がありまして、ここでいろいろいま議論されているような問題を討議しています。

仲村 もう一つ。現実にスポーツが学校教育の分野では手におえないほど高度化し、専

門化しすぎている、ということがあります。いままで教育というおりの中でうまく育ててきたスポーツという愛玩用のペットが、社会的な存在としては、政治とか宗教とか経済とか教育と同じようなレベルにまで巨大化している事実、そして、それをむりやり学校教育、大学スポーツというような範囲に閉じ込めるところに無理があるのと違つかという感じを、私はもっています。

元橋 そうなると、もつと国がそういうことをといることになってきますな。西ドイツあたりなんか相当やっぱり国が金出してスポーツの振興からやっていますわな。いまのアマチュアのスポーツというのは、ほんとに情けないことに、どこいってもまずこれです。全くお寒い状態なんでね。

仲村 本題から外れますが、スポーツ論議となるといういろいろいいことがあります。スポーツという同一のことはを使つていても、それが競技スポーツを意味しているのか、レクリエーションなスポーツを意味しているのか、このあたりの定義づけをしつかりしないまま一つにくくつて議論していますと、すれ違ひがあると思えます。スポーツ推薦の

問題にしても、大学教育の中で競技スポーツをどう扱うべきか、なかならず私立大学としての同志社では、というふうに考えるか、それとも学校教育におけるスポーツのよさとはいったい何だろうか、というようなところから発想するのはだいたい違ってくる部分があると思うんですが。

元橋 私の場合は大学の場合は競技スポーツということ前提にして、先ほどからお話したわけなんですけれどね。一般スポーツということと分けてね。

あんまり頭の悪い子はスポーツもあんまりうまくことやりませんな。とくに野球なんか見てましても、勉強できないような頭の程度の低い子は、どうしても野球も鈍ですわ。

西尾 たいへんおもしろい議論をしていただいています、今日の大学あるいは大学生と、そういうものを選抜する選抜制度、入学制度といったものについて、締めくくりということでお願いしたいと思います。

林 きょうは私にはひじょうに勉強になりました。同大のことなんかもいろいろ教えていただいて、私どものほうでも検討しなきゃいけない問題がひじょうに多いなというのが

実際の感想です。ただ、推薦とかスポーツとかいう問題が、何か不明朗なものが間に入っていないように、どのようにできるかなあということも考えました。きょういろいろ言われましたような多様な入学の選抜方式を考えていきたい、そうしてよりよい学園を作っていきたいと思っております。

元橋 最後のお話で、大学のほうで受け入れる試験をペーパーテスト一本だけじゃない、やはりいろいろな意味での可能性のある人を入れて、そして同志社のよさをもっともっと推し進めていただきたい。もちろん学内高校、一般高校の推薦、スポーツの選手の推薦それから校友の子弟の入学がもう少しスムーズにいけるように、ぜひともその点をお考え願いたい、その希望だけでございます。

仲村 現行の制度それ自体にはメリット、デメリットがあると思います。それを並べて、むつかしい顔で貸借対照表を横から見ているという時期ではない。決められる立場の人たちが、これは実行しよう、これは時期が早だとか、勇気をもって決めていくべき時期がきていると思います。同志社というのは、私学という意味でも、そういうことが比較的

やりやすい立場にあるんじゃないでしょうか。正しいと思うことを議論だけじゃなしに、大胆に採用していくべきだと考えます。

前田 われわれはペーパーテストによる客観性ということにすごく信頼をおいてきたわけですし、そのへんで、とくに小川先生や仲村先生がおっしゃった、新しい、総合的な選抜方法ですね、これは参考になりました。はたしてこれがわれわれの学校ですぐに実現するかどうかわかりませんが、そういう考え方というのは、少なくともペーパーテストだけというよりは、すぐれたやりかただと思えますので、一べんじゅうぶん検討をしてみたいと思っております。

まあ、私のほうの学内高校の推薦制度のほうにつきまちは、今後ともよろしくお願いたします。(笑)

小川 いろいろおっしゃいましたが、私はやはり同志社の建学の精神が死んでしまわないような、むしろそれが積極的に生かされるような選抜の方法を、今後も考えていくということだと思えます。

(一九七八年四月二十八日)

# 大学進学を再検討すれば

石 井 裕 二

大学進学のある方は、共通一次試験の実施および推薦入学制度の拡大をきっかけに、大きな変化を見せはじめている。現行の進学・入学制度の問題性が論議されるようになってからすでに久しいが、同志社大学においても数年まえから各方面において問題が自覚され、検討や手なおしがおこなわれてきた。本学の実情からいうと、制度を急激に一変させるようなことはおそらくありえないが、しだいに改革を重ねて、結果として見ればかなりの変化をもたらすことになるのであろう。

現行制度の問題性については、進学者をかかえ、受験主導的な教育の弊害に直面する中等教育の側をはじめ、教育全般の現情を憂える多くの人々から疑問が投げかけられてきた。それによって示唆された改善の方向としては、たとえば、詰め込み教育を排するために

入試の出題のあり方の是正を求め、また、より根本的には、長い少年期を通じての入試の圧力によって人格形成がゆがめられたり教育の落ちこぼれが生じたりする問題に対処して、入試制度そのものの再検討を求める、といったものであった。大学側でもすでに早くからこれらの問題には気づいていて、大学において実施可能な方策を考えようとしてきたことは事実である。しかし、共通一次試験や推薦入学制度をやるうとい出した大学側の問題意識は、必ずしも上述のような源泉からのものではなかった。したがって、これまで大学外において入学制度の問題を考えた人々、さしあたり高等学校側の人々にたいしては、共通一次試験や推薦入学制度は問題のまとはずしたような当惑か、さらに率直にいえば、迷惑をさえ感じさせるものではなからうか。

大学側の問題意識は、つきつめていうと、現今の大学における教育の不毛に向けられているであろう。大学自身における教育の不毛を、どうとらえ、どう解決するかについて、結論も合意もまだできていないわけではない。しかし、それがもはや成りゆきにまかせられるわけにゆかないある本質的な問題として自覚されているために、大学としては珍らしい大改革にさえ踏み切ろうとしているのである。以下は、その点に触れようとした私自身の視点からの試論である。

### 大衆性と私益性

わが国における大学の大衆化は、昭和三十年代にはじまって四十年代を頂点とし、現在ではやや沈静している。沈静の理由はいくつもあるが、第一には大衆化がいちおう行きつくところまできていること、第二にはいわゆる教育投資の効率にたいして疑問が生じ、大衆化の進行への内圧が低下したこと、第三には大学入学者の総定員が公費助成の関係などによって膨張を抑制されていることなどがあげられるであろうか。それにしても大学の大衆化はその進行がとまっているだけであって、現情そのものが大へんな大衆性の定着である。この大学の大衆化は、大学の様相を一変させた。そのうち、進学・入学の問題にからんでとくに注目したいのは、大学教育の目的の私益化である。

もともと大学教育には、その目的が国家もしくは社会の自己維持、自己発展の機能に位置づけられる公益性と、大学教育を受ける者自身の幸福追求の手段である面を重視する私益性とが混在させられていた。たとえば国立大学の場合などでは、設置者の側では、国家目

的としての人材養成のために国費をあて、教学の根幹をも国家が管理するという、一種の権力行為として大学教育を性格づける意図がはたらいていて、内外ともにそれを肯定しておりながら、入学者の側において、私的幸福・私的利益が追求されることを目くじら立てて抑圧するようなことはなかった。公益性と私益性とは混在し、共存していたのである。しかし大衆化は、そうした公益性と私益性との関係をくつがえし、事実上解消さえてしまった。

というのは、進学する学生大衆の側における私益性の追求が貫徹されて、公益性を事実上排除した形にしまったからである。そのため、今では、それがたとえ国立の大学であっても、教育目的の公益性などというものは(きわめて特殊な機関のほかは)、国費をもって経営をまかなわせるための名目であるにすぎない。進学する学生大衆が私益性を追求することにたいして制約がないばかりか、制約を加えようという発想そのものもはや成り立ちえないほど、私益性は貫徹されている。私学とのあいだに教育目的の相違は(きわめて特殊な場合のほむ)皆無である。こうなった国立大学に公立大学をも含めて、私学の側からしばしば「私立大学」(国民の税金によってまかなわれること以外に、私学と比較してなんらの特質をももたない大学という意味)の名称が与えられるゆえんである。

同志社大学にもそれと似通ったところがあるので、ひとごとではない。『設立の旨意』によると、同志社大学は国家によってではなく「人民」によって立つが、その目的は「一国を組織する人民」、「一国の良心ともいべき人々」の養成にある。人民のくわだてであることにおいて私学であるが、教育目的は私的幸福・私的利益に

向けられていない。しかしこの同志社大学も大衆化して、その目的の公益性は掛け声だけのものとなり、実質的には私益性がすべてを吸収してしまったのではないかと思われるふしがある。

### 私益性と入試実態

入試は大学がおこなう。合格者の判定も大学がおこなう。その意味では、入学者は大学側が選抜するのである。しかしそれは、形式もしくはたてまえにすぎなくなっていて、内実はそうといえないのではあるまいか。

大衆化は私益性を普遍化させた。それによって入学制度の公正とは、それぞれの進学希望者が私的幸福・私的利益を追求するための手段であることにおける公正さの意味になった。この意味での公正さの要求が行きつく先は、たとえば、大学進学の希望者はみんな進学できるようにせよとか、収容定員に限度があるのならば抽選にせよとかいう論議に向かうのかも知れない。さすがにそれでは現実味がないということで、進学者を平等な条件（そんなものがあるのかどうかは別問題として）のもとで公正に競争させよという要求が当然視されるようになった。その結果が、どこもかしこも似たり寄ったりの平均的な入試問題をやらせて、得点順に合格させる方式の定着であった。それにたいして大学の側で、その設置目的なり教育内容への適性なりを願慮して独自に手を加えらるとなると、不公正呼ばわりさえ受けかねない。

このありさまで、大学が入試を実施して合格者を判定するということとは、大学独自の立場からの意志の介入を意味しないところ

の、受験者の平均的得点力の測定であるにすぎない。仕組みの全体を見わたせば、進学者は受験者自身によって（取りこぼしを除けば）いわばオートマチックにきまるようなものではないか。大学の大衆化と私益化とは、そこまで実質化してきている。しかし、今のところそこまでである。

### もう一つの根本問題

大学進学をめぐる問題は、なにも教育目的の公益性・私益性に限られたものではない。大衆化と私益化とは、大学におけるもう一つの根本問題である学問と遭遇しなければならなかった。

大学において上述のような私益性を貫徹しようとすれば、教育内容、すなわちカリキュラムの立て方から講義・演習の内容にいたるまで、進学者の私益に適合したものとしなければならぬ。つまり大学では、進学者の私益を有効に実現しうるものとして、進学者自身が納得できるような教育をやってもらわねばならない。それはたとえば就職志向的教育であるかも知れないし、人によっては、自分がそのもとで満足できると考えている政治路線に沿った教育であるかも知れない。

じつのところ、入学制度において大衆化・私益化に迎合する形になった大学では、教育内容をも私益追求に適合させて改変しようとする成りゆきを見せた。ひとつ盛んであった大学改革には、その動向があらわれていたであらう。

しかし、ここでは、学生が納得して学習することによって必然的に教学実態の充実が期待されたにもかかわらず、結果はおおむねそ

れに反するものであった。大学教育の私益化は、入学制度において成功したとしても、教育内容、したがって「学習」そのものにおいては、強固な障壁につきあたったのである。

学問にはそれぞれ固有の根拠、固有の論理がある。それらを不変不動のものとして固執しなければならぬなどというつもりはないが、学問固有の根拠・論理、それゆえに学問の個性というものは、容易に失われたり改変されたりするものではない。ましてそれが、進学してきた者の私益志向とうまく合致しないからといって、私益性に向けてかんとんに調整し追隨することなどは、かりにくわだてたとしてもうまく行くわけがない。それゆえ、上述したカリキュラムの改革なども、うわべか戸口だけでの妥協的なおしにとどまらず、かんじんの教育内容自体にはほとんど手がつけられなかった。

#### 入学制度をどうする

進学者の私益志向と大学における学問性との衝突は、なにも今にはじまったことからはじまらない。しかし大衆化以前にあっては、進学者は大学とその学問性にたいしてじゅうぶんな覚悟をもつと同時に、大学教育を私益性だけで割り切らずに公益性にたいしても相当な配慮をはらったであろう。私益志向を抑制して学問性に順応しようとする努力することは、当然のこととされていたのである。現在の学生にその努力が皆無であるとはいわないが、努力する動機は著しく薄弱になった。その結果は、進学後において自分の学部・学科の学問性に戸惑うことからはじまって、意欲喪失、学習上の落ちこぼれ、転学・転部・転科の願望などとなる。さきに大学自身におけ

る教育の不毛と表現したのは、このことである。

要するに現状では、入学段階において進学者の私益志向を全面的に許容しておきながら、入学後の教育内容においてその志向を貫徹させない仕組みになっているために、こうした不毛が生じたのではないか。大学側において入学制度に手をつけようとする根本的な動機は、おそらくこの問題の自覚にある。

たとえば共通一次試験は、それによって各大学が学力試験（内実）は前述の得点力検定）にかかり切ることを廃して、出願先大学とその学問性にたいする出願者の志向性および適性を問うことに重点を置こうとする願いをこめたものであろう。推薦入学制度も、もとよりその意図のものである。それらの試行が問題の有効な解決策となりうるかどうかは別問題として、大学教育の不毛化にたいしてこの角度から手をつけようとすることにおいては、大学側に広範囲な合意が見られるであろう。

同志社大学の場合には、国・公立大学のような制約は少ないのであるから、もっと自由で幅広い試みが可能であろう。具体的には各学部教授会の判断によるが、これまでも各種の推薦入学制度が運用されて、大学もしくはその学部への志向性が考慮されてきた。入試において神学部が固執している面接にも、神学部とその学問性にたいする志向性・覚悟性を重視しようとする願いがあがる。私個人としては、入試そのものあり方を含めて、上述してきたような方向においてもっと柔軟に対処して、本当にやる気のある学生をより多く迎えるくふうを思い切って拡大したらよいのではないかと思ふ。

（大学神学部教授・実践神学・宗教学）